

# 今日のメディア利用者の 「存在論的」考察の地平を開く

知的な冒険にみちた好著

本間邦雄

今日、私たち自身の実際のありようは、どこに、どのようにつながられていると考えればよいのだろうか。それはもはや、住所地番で示されるような地理的位置と配置において一意的に「解されない」とは自明である。また、私たちが世界のなかで今日存在しているさまを、ハイデガー風に「世界内存在」と言ったとしても、だがそのとき、その日常的な周囲の世界は、ハンマーと釘と板のような道具的連関の環境というよりも、テレビ、パソコン、携帯電話で代表されるメディアの環境として了解されていることも言うまでもない。

著者は冒頭で、携帯端末に次々に付加される多機能性が、人々の具体的な要請にもとづきもせずに「ほとんど突然に誕生」し、その利用法にしても、機能が「付加された後から」考え出されているという実情に着目する。このように、人間が技術についてあれこれ想定し制御しようとする平面はごく限られたものであり、それをほかに越えるメディア技術のポテンシャルな圏域が考えられるわけである。このようなメディア技術の増殖する状況のなかで、今日の私たちのありようを新たに探究するために、著者は、ハイデガー的「現存在」分析と、ヴィリリオの「走行学」(dromologie)的世界の

発想を結びつける。そのうえで、今日のメディア利用者の「存在論的」考察の地平を開くという、きわめて斬新な試みをおこなっている。特に第一章と第二章は着想が生かされ、読みごたえがある。

メディアの環境における「現存在」のありように関して、著者は電話の例をとりあげ、通話中の人が電話に耳をあてたまま、お辞儀をしてしまふ場面がよく見つけられる。「現前」を括弧に入れて、「どこかにいる相手と声を交換している〈仮想の〉身体」のほうを選んでいる。したがって通話者にとって当人のありよりの大部分は、〈仮想〉の身体として通話という遠隔との接触そのものに託され、お辞儀をしている身体は見るからに間の抜けた、抜け殻の身体となる。

また、電話の着信音そのものがすでに剣呑である。着信音でドキッとするのはたんに音に驚いたためだけではなく、目覚し時計の不意のベル音とは異なり、「瞬緊張し、後さす」する。どこか遠方に電信的に通じているという自己の存在のありようが事前的に了解されているわけであるが、着信音は、なにごとかという可能性だけをひきずって、自分の生身の身体を経由せずに自己にたどり「無媒介に」現われるのである。そこに存在論的「不安」の余地が生じる。メディア利用の世界の内部で出会ってくる可能性のある存在者についての了解が、そのような技術的メディアの平面にかかわる身体そのものにかかわる「不安」と結びつく様相について、本書では仔細に分析されている。

著者は、電話発生期に生みだされた「幽霊」の言説もこのような「不安」に關与するものとして語っている。近年の和製ホラー映画の登場(メディア)の地平が主体-対象の枠組みからはみ出ることの陰画であろうか、や、近ごろのメディアを賑わす電話詐欺の跋扈も(それが、最後の送金に至るまで終始メディア-電信のライン上にある点もよくめて)、このような「不安」にかかわるものと言えるかもしれない。

このような「現一存在」の「不安」は、「ここ」を占める場所的存在者というよりも、ヴィリリオの「速度一存在」にかかわる「不安」となる。ヴィリリオは、自動車のような自主装置とメディアなどの電装装置に原理的に差異がないと考えている。したがってそのような速度的「走行学」的な環境のなかで、「乗物」×「メディア」×「住居」の等式が成り立つ。むしろ高速運動においてこそ装置の内部では静止、滞留しているのであり、そこに「速度一存在」の「不活性」という逆説が生じる。メディア利用者のありようは、遠方の環境を「ここ」にいなから経験するというよりも、「ここ」の「空け開き」(Lichtung)に立っている身体に向けて、「遠方を像として襲いかからせ」、その像を「ここ」へ現前させるといううかたちになると著者は語る。

「未開人はそれ自身充実した実体として」あるかどうかは別にして、鼓膜、網膜の残像など、現代の私たちが身体を「スクリーン」として差し出している事態を、私たちは考え直さなければならぬだろう。また著者は、生身の身体から切り離された《存在》の喧騒に声を与えるような新たな存在者を、つくり上げ、それとの接続における《存在》を導くことである(「傍点著者」と語るが、もし「ここ」は存在の棲家(ハイデガー)だとしたら、「それ」はどのように語りうるのだろうか。本書はどのように、私たちにさまざまな問いや思考をうながす論点を提供している。総じて、知的な冒険にみちた好著と言える。

(駿河台大学教授)